

【ねがいましては】

平成22年7月23日

KYOWA SCHOOL

第237号

「どうあるべきか」

夏休みに入りました。

子どもたちにとっては、待ちに待った長期のお休みです。彼らの中にあるものの中で最もうれしいものとしては、やはり勉強をしなくてよいことが一番になるでしょう。

毎日が遊びの連続・・・、自由・・・。しばらくは勉強にしばらくなくて済むことになります。しかし夏休みも終わりに近づく頃、やっぱりやってくる宿題・・・。古今東西、夏休みの宿題は、やはり後回しにされるもののようです。

先日、朝方のラジオから、ふと気になる言葉が・・・。「結果を考えることは後にして、とにかく行動してみよう。」

のような内容であったか・・・。はっとしたことは確かなのです。

子どもらしい生き方とは？ と、問われたら、きっとこの動きなのだなと感じたのです。とにかく自分の中に沸き起こったものが、そのまま行動となってしまう。その積み重ねの中に成功や失敗が様々入り交ざり、やがて冷静な判断力を兼ね備えるようになる。

なんと子どもらしい姿・・・。そしてその延長線上に見えるもの・・・なんと「ひと」らしい姿。

今の子どもたちを取り巻いている現実、その逆を行ってしまうものがあまりにも多すぎるような気がいたします。現実とは学校ということになりますが、結果を考えることなく勉強に取り組んでいる子はどれほどいるのでしょうか？

こころに恐怖心を背負ってしまった子は、すべての勉強に『結果』を備えています。一言で言えばトラウマということなのでしょうが、これがなかなか厄介なもので、例えて言えば、高所恐怖症や食べ物の好き嫌い、赤面症やどもりなど、このすべてが心から発する恐怖心が介入したものだからです。

今掲げたものについては、外部からしっかりとわかるものですが、いざ勉強から来る恐怖症の現れはテストの点からのものになります。

ここに大きな危険が備わっていることになります。ほとんどの保護者の方が誤解してしまうのは、「勉強していない・・・授業をしっかり聞いていない・・・集中していない・・・怠けている・・・逃げを打っている。」などとお考えになるはずですが。その結果湧き上がる感情・・・『怒り』。

しかしそれがお子さんの精一杯の姿であったなら、親の怒りは『罪』になります。子は谷底へと落ちていきます。

先日の授業で、ある中学生が発した言葉、「先生、この前の定期テスト対策の時にやったあの勉強、楽しかった。」

実は、社会科の地理で都道府県や世界各地の大陸など、覚えるものがほとんどという内容のものであったのですが、彼女はいつになく楽しそうに取り組んでいました。

そして私が彼女に質問します。「なぜ楽しかったかわかる？・・・実はね、Yちゃん自身が誰も気にせずに、マイペースで向かえたからなんだよ・・・。」

彼女の瞳にうつすらと光るものが・・・。まさにあのときの勉強は、結果を考えずにがむしゃらに向かっていたものだったのです。本来の勉強の姿を彼女自身が自分自身で見つけたのです。

この行動と逆行しているものがあります。お母さまやお父さまが感じてしまう感情です。『結果』です。

子どもたちは『結果』に苦しみもがいています。特に心根の優しい、感受性豊かな子は尚さらです。お母さんやお父さんの表情を、いの一番に気にかけています。「また叱られるかもしれない・・・また愚痴をこぼされるかもしれない・・・笑顔がなくなるかもしれない・・・。」

精一杯に向かおうとしているのに・・・精一杯にわかろうとしているのに・・・精一杯に良い点を取ろうとしているのに・・・。

子どもたちは孤独の中へと落ちていきます。わかってくれない・・・信じてくれない。

わたしにはひとつの信念があります。

こころを助けよう。

子どもに寄り添おう。

この夏休み、お子さんたちと触れ合う機会がいつもより多くなるようでしたら、ぜひ、寄り添ってあげてください。そっとこころの手を握ってください。

親として『どうあるべきか』・・・。

この教室で子どもたちが見せる笑顔の裏に潜むもの・・・テストなし、競争なし、評価なし・・・。自分自身が精一杯に生ききっていれば、それが正真正銘の100点。

CAMPのしおりの裏にあることば、『もしとなりに誰かいたら・・・そっとこころの手ぎにきってあげてね！』

まだ迷っている人がいたら、どうぞいらしてください。こころ、温めようね！